

地衣類をご存じだろうか。その名のとおり地面に張り付き、小さくて目立たず、コケ植物とよく混同される。火山の荒地などに最初に生えてくるイメージの強い生きものだが、庭の樹木の木肌や石の上、公園のコンクリート壁にも生えている。鉄道模型のトンネルの上を飾るリアルな木々にも使われている。じつは身近にもある地衣類の地味な「からだ」には、たくさんの不思議がつまっている。最近の研究では、地衣類は2種類の生きもの「菌類」と「藻類」が一つの体「地衣体」をつくり、不思議な性質をもつ生きものであることがわかってきた。

■ 来場者 10 万人を突破した茨城県自然博物館の企画展「地衣類」

ミュージアムパーク茨城県自然博物館の企画展「地衣類」は3か月半の会期で入場者数 10 万人を記録した。国内の県立博物館ではかなり珍しいことだ。この企画展を担当した同館植物研究室の福田 孝さんに地味な「地衣類」の企画展で来場者数 10 万人達成の秘訣を聞いた。

「ふだん気がつかないものなので、なるべく実物を使い、どんなところに生えているか、わかるように心がけました。それと、できるだけ身近なもので、その不思議に迫りました。まずは入り口の早回し動画で、ここの敷地に生えるコアカミゴケの何日間もの生活をあつという間に体験できるようになっています」と答えてくれた。

動画では、コアカミゴケのてっぺんにつく鮮やかな朱色の粉子器（胞子ができるところ）が、お日様に合わせ日々動いているのがわかる。さらに展示室に入ると同じコアカミゴケの 50 倍模型が目につく。生えているようすはまる



「地衣類」の企画を担当した茨城県自然博物館の福田さん
同館にて 2024.1.21 支倉撮影



コアカミゴケの 50 倍模型
(茨城県自然博物館 第 88 回
企画展「地衣類」展示品)
2024.1.21 支倉撮影



コアカミゴケ
(理科教材データベース
岐阜大学教育学部理科教育講座
(地学) より引用)

で森のようだ。

■ 地衣類の不思議な性質

「粉芽」と「裂芽」は地衣類が殖えるための特別なしくみで、コアカミゴケの場合、表面全体を覆うようについで、緑がかった灰色の粉のような粒々だ。粉芽と裂芽は、菌類と藻類両方の細胞からなり、2種が共生したまま栄養繁殖する。それが動物のからだについたり、風で運ばれたりして、同じ

組み合わせの別のからだをつくるというから驚く。

このほか展示では水をかけると酸性・アルカリ性で色が変わるリトマス色素を持つリトマスゴケや、紫外線 (UV) を照射すると体の中のある化学物質が蛍光を発するゴンゲンゴケなどが紹介されている。ゴンゲンゴケのこの性質はかたちがそっくりな別の種にはなく、どうしてこの違いが生じたのかも不思議だ。



紫外線を照射すると光るゴンゲンゴケ
(茨城県自然博物館 第88回企画展「地衣類」展示品)
2024.1.21 支倉撮影

■ 地衣類に魅せられて

福田さんはもともと学校の先生で、地衣類の専門家ではなかった。博物館に赴任して調査でいった富士山5合目の自然の中で、思ってもみなかった地衣類の不思議で美しいお花畑に出会い、興味を持つようになった。そして野外の調査に頻繁に行くようになり、今ではすっかり地衣類に魅せられ、専門知識も身についたという。

そして、地衣類はどこにでも生えていて、カラフルで美しいものが多いのに、一般にはまったく知られていないのを残念に思ったことが、この企画を担当するきっかけになったそうだ。

■ 茨城県自然博物館の地衣類標本

同館には佐藤正己 博士(1910～1984)が集めた、およそ2万点の地衣類標本が収蔵されている。地表に生えるものはそのまま素手で採集するが、木の幹や岩に着生するものはナイフやのみで削り剥(は)がす。よく乾燥したのち、採集したときの情報を添え標本としての体裁を整える。博士は茨城大学で教鞭をとりながら、こうして研究のための標本を全国で採集し、日本での地衣類学を発展させた。

博士の標本は寄贈されたあと、その教えを受けた元学芸嘱託員の中島明男さんが整理して、さらなる研究や教育普及のための展示に使えるようになっている。また、同じく博士に教えを受けた総合調査員の吉武和次郎さんは県内でこれまでに見つかった300種ほどの地衣類のうち、絶滅のおそれのある地衣類は37種にのぼることを明らかにしている。今回の企画展には、このような地衣類に魅せられた人々の成果もたくさん紹介されている。

■ 福田さんの思い

福田さんは今後も観察会などを通じて小学生や中学生に、ふつう知ることのない不思議な地衣類の魅力を伝えていきたいと話す。きっとその中から、また、地衣類に魅せられる子供たちが生まれてくることだろう。